

山岳小説

2024.05

久家隆男

以前は晴れていれば週に2回位山に出かけ、雨のときは読書をした。読書といっても文学書などではなく、山に関する小説、ノンフィクション、紀行文である。晴耕雨読でなく晴登雨読だった。最近は山行回数はかなり減ったが、山岳小説を読む時間は変わらない。

多くの作家が山岳小説を書いていて、記憶に残っている作品がいくつもある。例えば、安川茂雄の「霧の山」、井上靖の「氷壁」、北杜夫の「白きたおやかな峠」、松本清張の「遭難」、吉村昭の「高熱隧道」、夢枕獏の「エヴェレスト・神々の山嶺」、谷甲州の「単独行者・新加藤文太郎伝」、沢木耕太郎の「凍」等々である。

また、新田次郎、笠本稜平、樋口明雄は数多くの山岳小説を書いていて、各々10冊以上読んでいる。

新田次郎は山岳小説を最も多く書いた作家だろう。山好きの人なら必ず何冊か読んでいると思う。私が印象に残っている小説は「強力伝」、「八甲田山死の彷徨」、「聖職の碑」、「剣岳・点の記」、「孤高の人」、「栄光の岩壁」、「銀嶺の人」であり、特に「孤高の人」以降の長編3部作は2回以上読み直ししている。新田は富士山の山頂観測所に勤務し、極寒の登頂体験があるので臨場感がある。主に昭和30年から50年代にかけての出版であるが、今読んでも古い小説という感じはしない。但し、上記長編3部作には実在のモデルがいて各々「新加藤文太郎」、「芳野満彦」、「今井通子」であり、このモデルについての知識が乏しいと面白みが少し欠けるかもしれない。

新田次郎は海外の山を舞台にした小説も書いているが、海外の山に関しては笠本稜平が多い。笠本が舞台にしている山は世界中の高峰が多く、骨太で重量感がある。笠本は刑事小説や冒険小説も書いているが、私は山岳小説に関しては殆ど読んでいる。その中で読み応えがあったのは、「還るべき場所 (K2、ブロードピーク)」、「南極風 (アスパイアリング)」、「その峰の彼方 (デナリ)」、「ソロ (ローツエ)」等々である。笠本は海外の高峰は無論、国内の山も登山経験は少ないようだが、登攀シーンの緊迫感や過酷さに圧倒され、作家の筆力の凄さを感じさせる。

一方、奥秩父の山小屋での物語である「春を背負って」は、ほのぼのとした感じで肩の力を抜いて読める。

私は笠本の新刊が出版される度に図書館にリクエストして早々と読んでいて、これからも楽し

せてくれたものと期待していたが、令和3年に70歳で急逝されてしまった。新田を凌ぐ山岳小説作家になると思っていたが残念なことである。

樋口明雄の代表的な山岳小説は「南アルプス山岳救助隊K-9」シリーズであろう。要約すると下記の様になる。

広河原から北岳山頂に向かって3時間半位登ると白根御池小屋に着き、山梨県警南アルプス署が管轄する警備所が隣接している。積雪期を除き約10名の山岳救助隊員と3頭の山岳救助犬が常駐し、救助犬を扱う3人のハンドラーの内2名は若き女性である。主にこの女性隊員たちが救助犬と共に北岳で起きる遭難や事件に対処する物語である。

なお、警備所や救助犬は架空の設定であるが、山頂や各コースに違和感がなく、以前に歩いたことを想い出しながら読むことができる。これは樋口が北岳に何度も登っているので正確な描写ができるからだろう。このシリーズは長編と短編で20作以上になるが、私は全てを読了していて、次作品が出版されるのを楽しみにしている。このシリーズに興味があれば初回の「天空の犬」から読むのがよいと思う。

その他に、森村誠一は多数の山岳小説を書いていて私も数多く読んでいるが、K岳とかS岳のように架空の山の設定が多いのであまり記憶に残らない。

映画化された作品を以下に紹介する。

氷壁

1958年公開 出演：山本富士子、菅原謙次、野添ひとみ等

遭難

1961年公開 出演：伊藤久哉、土屋嘉男等

雪壁のラストシーンが印象的。

八甲田山死の彷徨

1977年公開 出演：高倉健、北大路欣也、加山雄三等

「天は我々を見放した」は当時の流行語になった。

聖職の碑

1978年公開 出演：鶴田浩二、三浦友和、大竹しのぶ等

剣岳・点の記

2009年公開 出演：浅野忠信、香川照之、仲村トオル等

山の映像が非常に美しい。

春を背負って

2014年公開 出演：松山ケンイチ、蒼井優、豊川悦司等

山は立山に変わり、剣岳・点の記の木村大作が再び監督だが期待外れ。原作の方が良い。

神々の山嶺

2016年公開 出演：岡田准一、阿部寛、尾野真千子等

キャスト、スタッフは高度順応して標高 5200m まで登って撮影したこと。